立教大學新聞
発行所
豊島区池袋三丁目
立教大学新聞学会
振替東京70852
電話(983)0111(代)内線97
発行人　野口定男
毎月廿日発行

高級D・P・Eスピード仕上
月光堂
立大新聞学会 立大広報課 其の他各部 専属御用
TEL(982)1065

盛り上がる安保阻止運動

第八・九統一行動行われる

本学からも四百名参加

立大会議のオルグ進む

日米安全保障条約の事実上の調印日が一月一五・六日頃と発表され、阻止の気運も益々高まって来た。学内においてもその運動は立大会議の活発なオルグ活動により警職法阻止以来の画期的盛り上りを示している。その結果十一月二十七日の安保改定阻止国民会議主催、第八次統一行動には百五十名の多数の動員を行い強くその態度を明らかにした。

第八次の二十七日、立大会議は午後十二時半、時計台下で学内集会を開催した。先ず当学会を始め、総委員会、社研、平和の会、弁論部、経済学会、アピル会等々が百明文を発表した。ここでも学内の安保阻止運動が先般、警職法改定阻止当時の教授団声明を除き、最高潮に達している様相を呈している。続いて"安保改定絶対反対"等数本のスローガンを採択、会場において加藤栄議院議長宛の請願書にサインした後、それを各自持参して、国会請願に移った。この二百五十名の学友が国会前チャペル・センター横に集結した二時頃には、既に学生、労組、民主諸団体約二万が集っており、直ちに請願書の受領が行なわれ管であった。しかし、警察庁側は、約五千の警官をもって国会附近三ケ所に集った請願者の道をふさいでいた。国会正門前には数台の装甲車を横に並らべ、憲法、国会法、衆院規則にもとづいた国民の請願権を不当にも抹殺しようとしていた。請願を受ける、受けないで数度もみ合っている間にも、請願者は続々集結、定点集合していた人々も国会前へ移動を開始した。その数は既に八万と見られる多数である。国民会議は直ちに国会前で集会を開催、指揮団のうち浅沼（社党）野坂（日共）岩井（総評）の諸氏等が、この個人請願の合憲性を抗議、堂々と国会に入るうと激しい口調で訴えた。そしてこの激励に呼応して、まもなく学連、全金属の一部が、正門突破を試みたこの頃になると来、警備議長からの依頼を受けた五千の機動隊が続々集合、力で国民の声を圧殺しようとした。

最終的にはこれが直接の挑発となり八々の心の中には昨（二十六日）の晩の国会で自民党が力でサエトム賠償案を通したという怒りがうずまいて群集は一きょに国会前庭に突入した。そのあつけなさは、今まで力で押していた警官隊の行動としては多少とに落ちない処もあり、挑発をしておいて、わざと、全学連その他を突入させたのではないかという、うがった考えも広まっていた。

いづれにせよ、この日の行動は翌日以後の予想し得るマス・コミの扱い方を除いて、全く正しく恥ずべき行為ではなかったという事がその場で確認された。この意味からも、八次行動以後の国民会議の全学連脱退動台、浅沼発言等は全く遺憾であり、政府側の思うつぼに自ら入ったというより外ではない。また、安保改定阻止を消極的であるが、一応受持していたマス・コミが、好新聞とばかり目を国会突入後往来に向けそれに、数々のデマが入り混つて、国民の目は安保から完全にそらされてしまった。

したがって、その影響は意外に大きく十二月十日行われた第九次統一行動日も国民会議内で総評が早くから職場闘争でいくという低姿勢を取り全学連と衝突したまま迎えたのである。更らに全学連内でも、国会へデモをかけるという急進派と、戦略的にもそれに避けるべきという派が互いに妥協せず十日午前三時日比谷野外音楽堂において、安保改定阻止、デモ規制法反対、不当弾圧反対学生総決起中央集会を開催するとやっと発表した。

当日は、全国的になると始めて官公労中心の本格的実力行使が行われ、全国で四百万人が参加、七百五十ケ所で地域集会、デモが行なわれるという一応の成功はみた。全学連の日比谷集会には、立大から前回をやや下まわる百五十名が参加合計八千の学生が集ったが、二十日以来、東大学内に留っていた全学連、早稲田、清水両君が当日朝、学外で逮捕されたため意気上り早く、石堂、日本農民党の投石や投木の挑発にも動揺であった。また、安保調印を急ぐ内閣は経済要求を若干譲歩してもという気があり、国際労組が始め続々経済要求を発表、実力行使を中止するはめになった。国民共斗会議は集会を持たなかったので全学連への支援が期待されていたが、こんな訳で盛りあがらず、七時新橋土

級委員会で着々準備

文化会 新委員長に木下君

文化会新役員は十一月末の文化会総会で決定し、十二月一日、鈴木前委員長からバトンを受げつぎ、活動を始めた。しかし、長時間の投票にもかかわらず、当選者は定員に足らず、新役員の中で討議の結果今のところ、次のメンバーのまま強行し、補欠選挙はしない模様である。新役員は次の通り。

委員長　木下　章（経済学会・経二）
副委員長（会計）　田中　昌人（写真・社二）
副委員長（議長）　中村　紀雄（ホテ研・経二）
常任委員（編集）　梅本　雅文（E・S・S社二）
常任委員（渉外）　上杉　義則（広研・経二）

級委員会で着々準備

実現するか学生健保

十月下旬、級委員会では学生の厚生問題に関するアンケートを行い、そのアンケートから学生健康保健問題を中心的問題として引出し完全な学生の健康管理を行うため級委員会厚生部を中心に他大学の健康保険組合を研究するとともに立教にもよりよい学生健康保健組合を作るために立ち上った。

【解説】

今年の春一人の立大生がふとした事から破傷風で死んだ事件があつた。その事を契機として級委員会の中で急に学生健康保険組合を作ろうという話がもち上つた。現在、立教には診療所があり、一応我々の健康管理をしている事になっている。また、我々はそのために毎年六百円を納入している。

しかしどれだけで我々の健康管理は完全といえるだろうか。十月級委員会が行ったアンケートの中の学生健康保険の項では学生健康保険組合が必要かどうかについて"必要である"というものが五七%もいたという事は学生が現在の学生に対する健康管理に満足しているものではないということである。それでは、現在の管理、状態はどうかというと、我々は毎年六〇〇円の健康管理費を払っているが、立教の診療所は独立採算制をとっている（小、中、高、大学の計理から独立）ので診療所の運営は我々の出す六〇〇円によって行なわれていることになる。このような状態ではたして完全な学生の健康管理が出来るだろうか？

私達の毎日は常に病気、交通事故などの危険にさらされている。私達が罹病になったら診療所でどこの病院がよいでしょうといわれるだけで、治療費は全て個人負担になる。これでは安心して学生生活も出来ない。ではどのようにしてこの泥沼から脱け出したら良いのか。方法はただ一つであるという。我々が自らの手で健康保健組合を作ることであるという。すでに同志社大学、慶応大学では健康保険組合を作り、それぞれ成果があがっているようである。立教でも学生健康保険組合を作ろうという動きが級委員会の中にあり今後の活動が期待される。

当分授業料値上げせず

公開質問状に総長回答

級委員会では去る十月二十七日学園民主化と学生生活の条件改善のため立教学院理事会に対して公開質問の形で質問状を提出した。それに対して十一月十七日、松下総長から回答が出された。理事会に対する質問状に総長の名前で回答したことについて理事会では直接に回答せず、理事会の代表者である総長の名で回答することになっている」といっている。

これらの回答については一応問題はないと見ているが、授業料その他の件の回答については質問の仕方が悪いために充分納得の行くものではないが、一応、二三年値上げはしないと見ている。また負債返還方法についての質問に対する回答については、真に大学について理解をして答弁してくれるものなら問題はないが、いわゆるヒモツキであるなら問題であるとしている。

最後の三者協議会についての質問に対する回答については、学校は三者の懇談といいわは私的な場で理解し合おうとしているが、級委員会としては、学問の場を守るために、公的機関で話し合い、そこで決定した事については守らなければならないような機関均ち具体的には諮問機関のような形で三者協議会を作りたい意向であるとのこと。これらの質問状と回答は次の通りである。

公開質問状

立教学院理事会の開かれるにあたり、立教大学の全学生の組織である立教大学学生会級委員会は貴理事会にたいし、つぎの三点にわたる質問を全学生に対する公開形式において提出いたします。

私達はこれらの質問事項にたいする貴理事会からの御回答を本学会学生に公表しなければ試ならないため貴理事会が至急審議のうえ、すみやかに回答されるよう要望いたします。

「一、一九六〇年度よりの大学入学者にたいし、授業料、入学金、施設費について値上げの意志をもっておられるかどうかについての回答を求めます。また一九六一年度よりの入学者についてはどのような意向をお持ちですか

（一）授業料について
（二）入学金について
（三）施設費について
（四）その他学生の負担する一切の諸経費について。

二、本年度の法学部校舎の建設等にともなう負債の返還方法についてどのような具体策を考慮していられるのかおたづねいたします。

三、総長公選の結果、松下正寿氏の再選となりましたが、松下総長から前任期任任中に「考慮している」との見解をいただきました立教大学全学協議機関たる三者協議会（理事会代表、教授会代表、学生代表により構成）の設置につき、その意志の有無及びその理由をおたづねいたします。

一九五九年十月二十八日
立教大学学生会級委員会

回答

一九五九年十月二十八日附公開質問状に対し左の如く答える。

一、授業料その他学生の負担する経費の値上げはしない。

二、負債返還方法については、学園会計の整理を目下実行中である。

三、行政に関し、学生を参加させる意志はない。但し、総長、教授代表、学生代表が懇談して理解を深めることは大いに望む。

立教学院理事会　御中

新聞時評

国会デモ

第八次安保改定阻止統一行動における全学連の行動を中心としておらゆるジャーナリズムの騒ぎようは大変なものだった。しかし新聞に限っていえば異例の一面トップをはじめあれだけ大かがりな報道をしたにもかかわらず結局は社会面記事的な取り扱いしかしていない。しかも、わすべりな現象面のみをとり上げただけでなく明らかに頭から独断的な判定を下した奇妙な客観的報導記事である。

いわゆる識者といわれる、新聞にとっては全極側利なしかも無責任で無然とデモを行い、散々伍々解散した。以上であるが結果的にみると第九次統一行動には心配した程の騒乱も無かった。

焦点はずした報道

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対する大逆の口を借り、あるいは放射線、天声人語など自らのコラムを利用し"ヤクザのなぐり込みだ""赤いカミナリ族だ"等々辛辣な非難を全学連に向け"良識"をはずれた一群として読者大衆に印象するとに懸命になっている。

しかし、この問題の本質はヤクザのなぐり込み"ヤクザのなぐり込み"としてしか扱わないのか、または扱えないのか不可解といえば不可解なことである。

新聞のこうした焦点をはずした報道の仕方、論調が国民大衆に安保改定というさしせまった現実の重大問題から目をそらせる世論操縦を行おうとしただけでなく"カミナリ族"のレッテルをはってこの動機的民主団体を握りつぶそうとする一歩積極的な意図を持っているとみるのもあながちがちすぎとはいえないだろう。

しかるに、現在の商業新聞にこの問題の本質的解明を求めるのはないものねだりというものかもしれない、根本的な所で権力とレールを同じくし資本主義路線に乗り切ってバク進している大商業新聞にとってそれは自分の心臓をつかみ出し、血液をとりかえることを意味する。敏感なテン屋さんは今度の国会デモに己が命にかかわるある危機感を感じ自らの巨大な武器を持つて反撃しようとした。"社会の公器"というコロモをまたまた巧妙に無用し終るかと思いきや、今度こそは不覚にもとり乱し思わずみにくい恥部を露出してしまった。

国民的統一組織を守れ

論説

全学連攻撃は本末転倒

日米安保改定条約調印を来春一月中旬アメリカで行うという政府側の具体的スケジュールが提示されるにいたって、昨年末いらいの安保改定問題もいよいよさし迫ったものとなってきた。このような新しい情勢の中に、昨秋の警職法の場合をしまわる反対運動をもりあげてきたわれわれ反対者の側も、二月一〇日の第九次統一行動を終えて、二、三検討すべき問題が提起されてきている。

◇

まず、一一月二七日の第八次統一行動についてであるが、ここで問題としたいのは、国会構内に入ることが法律的に正しいか否かといったことではない。

第八次統一行動は、八万人といういままでにない大規模な国民大衆を動員しての、はじめての国会請願デモという形をとって行われた。しかし、それも反対組織の混乱を手ぐすねひいてまっていた政府自民党と、体制側の機能をはず商業ジャーナリズムによって国会乱入という一つの事件とされ、国民の注視を"法への挑戦、責任の追及"という方向へと操作されたし、その上一国会周辺デモ規制"という政府自民党の念願に口実を与えた。

これら政府自民党の繰返しにあつて反対組織が崩壊するなどということはまったくありえないことだが、商業ジャーナリズムを通じて政府自民党の操作にあやつられる未組織大衆と、それら大衆にたいする認得の必要性とを考えると、第八次統一行動は戦術的にはマイナスであったと評価されよう。

われわれ反対組織の内部において、安保反対運動は国民的統一戦線である という立場から、これらの責を、直接行動を起した全学連に求めることもできよう。しかし、それ以上に全学連にたいして一方的に責任をすりつけ、反対組織の混乱を助長することは、不可解なことである。

ついで問題とされるのは、第八次統一行動にみせた社会、共産両党、また総評などのだらしなさが、そのまま第九次の統一行動にもも越された点である。

二月一〇日、全学連は一万人の学生を結集して中央集会を開き、政府自民党、ジャーナリズムの異様な注視のもとに、統一ある整然としたデモを行った。

ところが、社会党、共産党、総評を中心とする安保改定阻止国民会議は、なお不信と不安とを与えたという点において、徹底的な誤りとされねばならないだろう。

われわれは、おのれの内部事情だけの一面トップをはじめあれだけ大かがりな報道をしたにもかかわらず結局は社会面記事的な取り扱いしかしていない。しかも、わすべりな現象面のみをとり上げただけでなく明らかに頭から独断的な判定を下した奇妙な客観的報導記事である。

いわゆる識者といわれる、新聞にとっては全極側利なしかも無責任で無然とデモを行い、散々伍々解散した。以上であるが結果的にみると第九次統一行動には心配した程の騒乱も無かった。

焦点はずした報道

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対する大逆の口を借り、あるいは放射線、天声人語など自らのコラムを利用し"ヤクザのなぐり込みだ""赤いカミナリ族だ"等々辛辣な非難を全学連に向け"良識"をはずれた一群として読者大衆に印象するとに懸命になっている。

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対する大逆の口を借り、あるいは放射線、天声人語など自らのコラムを利用し"ヤクザのなぐり込みだ""赤いカミナリ族だ"等々辛辣な非難を全学連に向け"良識"をはずれた一群として読者大衆に印象するとに懸命になっている。

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対する大逆の口を借り、あるいは放射線、天声人語など自らのコラムを利用し"ヤクザのなぐり込みだ""赤いカミナリ族だ"等々辛辣な非難を全学連に向け"良識"をはずれた一群として読者大衆に印象するとに懸命になっている。

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対する大逆の口を借り、あるいは放射線、天声人語など自らのコラムを利用し"ヤクザのなぐり込みだ""赤いカミナリ族だ"等々辛辣な非難を全学連に向け"良識"をはずれた一群として読者大衆に印象するとに懸命になっている。

しかし、この問題の本質はヤクザのデイリなどではなく、あくまで安保改定の問題であり日本の政治的現状の問題である。いいかえれば何故国会構内突入という行動に出ざるを得ないかという背景の究明なしにはこの問題の解明はあり得ないのだ。

燃焼し続ける民衆の怒放者に対

職就

決定者九九二名に

女子は昨年より後退

十二月九日現在、学生人事課が発表した就職決定者数は九百九十二名で約九十八%に達している。昨年の就職決定状況では九十八%の就職率に達したのは二月に入ってからであり、今年度の就職決定が早いテンポで行われたことを物語っている。これは今年度から試験日が十月一日に一斉に開始されることに決定したため十月の一ケ月間に試験日が集中する傾向が見られたためである。この結果、十月下旬から十一月上旬にかけて決定者数は急激にふえたことがうなづける。

今年度の就職は経済界の好況と相まって求人数が非常に多く、応募側に選択の余裕が拡げられたため個人の希望する業種に就職が可能になる公算が大であったともいえよう。また、決定者の中には縁故関係によるものも相当数あることも推測される。

女子の就職は、その後も低落気味で、人事課の話しでは昨年よりむしろ下回るといっている。

これは、女子に対する求人数の少いことも一因であるが、応募者がきわめて少数であることに最大の原因があるといっている。

法学部 教授紹介

四月から設置された法学部教授陣のプロフィルを順次紹介しています。

高橋康之助教授

民法担当である。フランス法学が専門で、東京大学出身。現在研究しているのは「フランスの不法行為」。すなわち、フランスでは以前は不法行為を犯したものを刑罰するという形がとられていたが、最近はそれが次第に被害者に対して、どのように損害を補償するかという方向に変つてきている。しかもフランス民法は成文法が古いので、法律を変えていくということがむづかしく、判例によっておこなわれている。これをフランスの判例によって研究するということだそうだ。

盛岡に生れ、一高、東大。東大助手を経て、早大、中大等で講師をされたが、昨年は本学経済学部の教授になられた。

沢木敬郎助教授

昭和二十四年、東大法科へ入学したが、二年の時に学生運動で退学になり、一年間浪人した翌年再び入学、大学院、研究生生活を含めると、なんと十年間も東大の空気を吸ったという。

本学では、国際私法担当。「国際私法上の連結点のあり方」という書き上った原稿が机上に積いてある。「国際私法」を広辞林でひくと"内外私法適用範囲を規定する法律、各国の私法の相違によって生ずる法律の抵触を解決し、各種の法律関係につき、それぞれその準拠法を指定する法律"とある。

大学を卒業する間際まで、これを勉強しようとは考えてもみなかったそうだ。同じく四月より本学法学部教授に赴任した江川英文氏とは非常に親しく尊敬し合う間柄である。

法学部 教授紹介

高橋康之助教授

沢木敬郎助教授

ペリー氏逝く

竹田鉄三

氏は何かの雑誌で読んだ笑話であるが、アメリカの或る商人が亡くなった。彼は商売は上手であったがメソタに教会に行った事もなく、世間一般の連中者であった併し親戚は教会花に埋もれ、讃美歌は高らかに歌われ牧師は長々と彼の聖徳をたたえた。余り美辞麗句の話が長いので、たまり兼ねた未亡人は息子に「お前あの棺の中に入って居るのはホン物のお父さんか見て来てらん」

ペリー先生の葬式は誠に質素厳粛なものであった。弔辞もなく説教もなく、ただ総長の淡々と読み上げる故人の履歴。それに写真もなく聖歌も歌はれず。ただわずかな花が飾られてあった。併し会葬者の数は七百を超へ、その中には大東文化大学の学生及び加害者の親類と云う仏教の尼僧も居た。此の葬式は今までにないよい葬式であり、ペリー先生を葬るに最もふさわしい礼拝であった。人々は心の中に泣き、心の中に故人の徳を偲んだ。

先生は何事も質素であり、少しも勿体ぶらず、怒った顔を見た事がない。いつもニコニコとして誰にも愛され誠に気分のよい人であった。特別にキリスト教に就いて講師をされたが、昨年は本学経済学部の教授になられた。

英語で書いた世界のすべての新聞は勿論、ペリー先生祈愛らず、此お祈を称へながらニコニコと神様の処に帰へられた事であろう。私は何も理窟を書きたくないが、日本を愛し、東洋の青少年教育のために一生を捧げた、ペリー先生が、学校の構内に於いて他校の学生とは云へ同じ日本人青年の暴力に依つて、ああ云ふ悲惨な最後を遂げられたと云ふ事件、神は彼の死を通して何を我々に語り給うか。ペリー夫人は先生の遺体を棺に納めた直後、人々に部屋から出て貰ひ娘エリザベスと私の手を固く握り棺の前に立つて力強く祈った。その祈の言葉の一部を今でもハツキリ記憶して居る。

「神は今、父を天を突然に召し上げ給うた。それには神様の深い御心のある事を信ずる。」と。

今度の事件は日本の新聞は勿論、英語で書いた世界のすべての新聞に報道されたやうである。世界の人々はどう云ふ心で此報道を読んだか、而して我々キリスト主義学院の学生、職員、教師はこの事件をいかに受け取るか。（たけだ・てつぞう氏は本学チャプレン）

波紋

▼先の十一・二七統一行動は、国会乱入というマス・コミの悪宣伝で幕を閉じた感があるが、皮肉なことに今度の安保闘争の中で最も影響力の大きかった行動であったといえる。しかし、一方では、デモ規制会期延長の日実を政府に与えた結果となり、その成功、不成功はまず商業数学の問題以上のものだろう。が、少なくとも、安保問題を国民の審議に植えつける効果はあった。先日の十二・十統一行動を見ても、労組が職場闘争に切り代えたため全体の盛り上りが表面に出なかったが、日比谷公園での全学連総決起大会に集った学生も予想を上まわる八千五百人にのぼったやはりあの時、正否は別としても、あの時なりに必然性があったのだろう▼マス・コミが最大限にそのスペースをさいた国会デモに続いて、新聞の底意は判断しかねるが、紙上を賑わしたのは、葉山、清水両東大生の学内ろう城問題である。論議の中心はもつぱら大学の自治に向けられたようだが、はたしてそれほどと立派なやりとりであったかはいささか疑わしい。警察側から考えれば、激しい抵抗を示して同学生を逮捕してみたところで事件の解決にはならない。それによって、世間に悪印象を持たれることは明らかにマイナスである。しかも相手は天下の東大だからな若原である。まず第三元まる。紳まってメダシというとこだろう▼これはなにも冗談を言っているわけではない。不幸にして、警察側の行動は常に用意周到な計算の上に立っている。世間の目に映らない裏でその陰謀行動は拡って潜ける。ある政治家は、学生運動で少し目立つものは指ブラック・リストにのっている。情報はを部掴んでなると公言してやまない。手を変え品を変え、警察はその触手を伸ばしてきている▼先日、本学で映画"きけ！わだつみの声"を上映した折、相変らず警察の情報員がもぐり込んでいた。おとなしくて有名な本学でさえ、資料の目当てにされるのだから、その徹底振りは想像できよう。現実は大学の自治を妨害する様な卑和ではなさそうだ、まだまだ権力に近いという感覚で大衆を抑圧しようとする行動がみられる▼ついでだが、眼のある人は東大と本学を置き換えて考えてみなさい。学校側にしろ、学生側にしろ、あれほど強く自己の立場を主張し得たろうか。じつくり考える絶好な機会である。

お知らせ

当学会で、毎年、全国の受験生を対象に本学の受験案内をもいらべき、特集を発行しておりますが、今年も次の様な内容のものを発行する事になりました。定価は例年どうり三千円で、タブロイド十八頁の豪華なものです。

各学部別の昨年度試験問題を全載の上、最近、三カ年の試験問題を中心にその傾向も追求しております。又、各学部の教授陣、施設、特色を克明に案内し、更に、入学してからの案内も加えられており各サークルの紹介、進学状況、先輩の消息を十八頁、をフルに使って掲載、これらは受験生はもとより、在学中の学友諸君にも、便利だと好評を得ているものです。

立教大学新聞学会

Sailor
さしこむだけで
歩きながらでも簡単に
インキが入る便利なペン
OK
新発売！　特許第211314号
セラデラックス　カートリッジ式　¥600
カートリッジ6本入　¥30
豪華な景品が当る
抽せん券付　筆森　デラックスセール　実施　中　1月20日迄
くわしくはお近くの販売店でおたずね下さい

日本の産業シリーズ
高宮　晋・稲葉秀三　監修
現代日本産業の全貌を企業の面から把握。
法・経・商系の学生はもとより、理工系の学生にも絶好の"日本産業入門"シリーズ。
就職コース選択の相談相手としても好適。
① 電子工業　小林功・滝本浩　¥150
エレクトロニクスとわれわれの生活、電子工業発展の歩み、商品の解説、生産の現況と市場、主要企業の姿、将来の見通し等を企業の実態を中心に平易に解説。
② 石炭　今井琴三　¥150
世界的エネルギー革命の接近によって経済的・社会的に幾多の深刻な問題を蔵して史上最大の危機に直面している現代日本の石炭産業を理解するためにも好適。
③ 海運　松尾進　¥180
海運の歴史、海運市場、国際競争、企業の実態について、わが国の海運企業が国際的な競争のなかで生き抜いていく上の鍵を求めながら解説したガイドブック。
以下続刊　小B6判美装　（内容見本進呈）
東京神田神保町　有斐閣　振替東京三七〇番

H・Fストーム厚著　山村昌・原田耕介共訳
磁気増幅器　A5・五九四頁　価一、二〇〇円
ステーチキン編　浜島朗訳
ジェットエンジン理論【ターボ機械】　A5・四五八頁　価一、二〇〇円
山下英男　山村昌共著　電気機器学（1）
稲田金次郎共著　小沢敬次郎共著　電気鉄道（1）
東大教授　近藤次郎共著　積分方程式とその応用
千葉大教授　菊池平共著　機械製作法（1）
茨城大学助教授　高橋哲夫著　機械技術者のためのエレクトロニクスとその応用
鉄道技研　市川邦彦著　ディジタル制御技術の基礎
価A5・一七六頁　価A5・三八〇円　価A5・五五〇円　価A5・三四〇円　価A5・五三〇円　価A5・四〇〇円　価A5・二四〇円
——〒各50・図書目録贈呈——
東京文京区鶴巻町　コロナ社　振替東京1.4844

神山圭介著　B6価二五〇円
盗賊論　最新刊
梅本克己著　B6価二六〇円
過渡期の意識
—哲学とは何か—観念論から唯物論への過渡にマルクス主義哲学における主体的人間のありかたを追求する
現代思潮社　東京千代田九段4の6　振替東京79442番

マルキ・ド・サド著　澁澤龍彦訳
悪徳の栄え
B6特装豪華本　上下各巻580円

須之内品吉述
商法講義案　発売中
—三十四年度三年後期用—　一二五頁　定価一〇〇円
第一篇　商法総則
第二篇　会社
—三十四年度四年用—　一〇二頁　定価一〇〇円
第三篇　商行為
第四篇　海商
豊島区池袋三丁目　振替東京七〇八五二
立教大学新聞学会

我妻栄　宮沢俊義　薬師寺志光　監修
法律小辞典全書　3
民法辞典
我妻栄　四宮和夫　遠藤浩　共著
小B6判　416頁　総クロース上製函入　価390円　（〒52）
□誰にも買える新法学の権威書！
□どこにでも持つて歩ける小型版
■入門者に絶対必要な基本書
■試験問題の答案練習に絶好の友
■教科書にも六法にもない語を満載
大・中・小項目・人名・新語併せて実に1550項。現代民法学の最高水準を盛り込む法律中の法律・民法習得のマスターキイ
《量内容見本》
一粒社　東京・台東・谷中真島町1　振替東京165190

怒りをこめてふりかえれ
書の望の待・新刊
好評発売中
第二次大戦後の世代を象徴する「怒れる若者」！新しい世代のバイブル、合言葉となり、欧米各国で翻訳、上演、映画化され、全世界に爆発のセンセーションをまきおこした問題の書の完訳なる。
翻訳権獲得
ジョン・オズボーン作
青木範夫訳
福田陸太郎解説
B六判二〇〇円
東京都新宿区新宿1丁目4　原書房　電(34)2054 1786

日本の反体制組織(四)

―日本共産党―

山田宗睦

戦後の誤診を克服し
社会主義へのビジョンを

日本共産党について論ずることは、この国ではなお市民的勇気をかちとっていない。すべての政治党派がみずからについて論じる資格を、その党派にメンバーとして参加することに求めるのは、一般的に当然のことといえる。けれども、共産党の場あいは、この党派が、資本主義社会そのものを根底から変革し、それによって一切の階級制度を撤廃するという、支配権力にとって徹底的に敵対的な党派である、という理由で、この党派を論ずることにしんが、支配階級と共産党とのいずれに属するか、という党派性を表わす。また、反体制内での共産党論議も、この敵対性の反体制内への流入として、共産党からは手きびしくあつかわれ、また発言者のがわにも、共産党への気がねが存在した。戦後の中点(五一年)での竹内好の日本共産党批判、それについての小田切秀雄「人間の信頼について」の評価は、同調者(シンパ)によるひげ目(コンプレックス)をとらえた共産党への論議から、平等の立場での共産党批判へ、という共産党論の展開をしめしたものである。

にもかかわらず、こんにち、日本社会党は、『中央公論』『朝日ジャーナル』その他において、議論の焦点をもつのに、日本共産党論は、そういう焦点をもたない。それはジャーナリズムが体制側の機能をはたすからだけではなく、そこには、論議の敵対性、論者と党との心情関係、にくわえて、戦後の日本共産党の失敗が作用している日本共産党は、国際的にみて五一年テーゼ(新綱領)の現実把握の失敗と戦術の誤謬で、日本における反対制運動にたいし、統一的なビジョンと指針をあたえなかった。この調査にたいし五五年の六全協決議いらい、日本共産党は正面からその克服ととりくみだしたことは、認めねばならない。けれども、この克服には、共産党じしんの自己変革が必要である。それは、体制への徹底的な敵対者という性格をかえることではなく、まさに、客観的にそうであるために、自己がもともとそうであるという主観的な思い上りの固定を、うちやぶることである。たとえば『現代の理論』の廃刊は、たんに党内の理論的異見が党内小集団をうみだすという判断をし、それへの予防措置ということで根拠づけられたが、この処置が反体制諸勢力内部で一般に共産党の依然たるセクト性の存続ととられた事実はもう少し列明に考えられなければならない。

山田宗睦氏

日本共産党論の前提は第一に、それがもっとも一貫した現体制への敵対者である労働者階級の前衛党派であるということである。これは論ファンスの前提であるが、それだけに、この前提に、主観的信念や使命意識ではなく、客観的な存在として、適応しているかどうか、が合理に科学的に検証されねばならない。この点に関してとくに、労働者階級が、こんにち理論が可能になった。この変化について若干の論点をとりあげたい。

日本共産党が小さい党であることは、人民戦線の理論と経験を体現できないことと、正確に照応する。国際的にみて、人民戦線の経験を理論化した党(中国・フランス・イタリア)は強大となり、また現在フランスの党の停滞にくらべ、いタリアの党が活動的だという状況のちがいも、人民戦線の経験のくみとり方に関係がある。アジアでも、インドネシアの党が、現情分析を正しい綱領をたて、数年にして、数万の党から百万人の党へ発展した事実を、直視しなくてはならない。こんにち日本共産党が数万の党に縮小した苦い経験に学び、歴史的―理論的にこの誤診を解明し、全党の理論武装を編成しないかぎり、主観的信念では弱小な、一集団にとどまるほかはない。

人民戦線を、スターリンは過小評価した。社会民主主義をファシズムとともに、独占の双生児とおくドグマに固執したからである。デイミトロフは、人民戦線の出現による変化を戦術に限定した。統一戦線戦術は、ファシズムの民主主義への攻撃を防衛する局面に限定された。デイミトロフをこえて、統一戦線政府が社会主義権力に発展しうるとしたのは、トリアッチであった。そこには、一国内で、独占を主敵に、諸階級・層の配置がえをする戦略的転換の把握がある。労働者・農民の革命的独裁のソビエト理念を、「古い図式」とし、「新しい民主主義」のための「同盟の権力」を、「古い図式」とし、「新しい民主主義」のための「同盟の権力」を、しかも、「都市および農村の中間層」のもつ意義を認識できない欠陥がある。

日本共産党もまた、四八年に、産復興綱領を作製し、平和経済の国民的民主的再建をめざした経験をもつ。このときの最大の欠陥は、性急な国営人民管理の主張と、中間層の疲弊の過小評価と、であった。この欠陥をのぞくとき、この経験は、五三年の総評の平和経済の計画とうながつて、日本の社会主義への道の、原体験としていうかされるであろう。

わたしは、日本共産党を恒常的「悪役」論でみるのは誤りだと考える さいきんの戦後世代が、ほとんど共産党の無視と統一戦線へのビジョンの欠落をもっていることに、一つの危惧をおさええない。たしかに、戦後の共産党は、その成果をみずからの誤謬で相殺してきた しかし、戦後の歴史的運動は、一方に占領権力から日本の独占資本の権力への移行、他方に共産党を含めた革命勢力、という二つの潮流をふくめた革命勢力、というこの二つの潮流が絡り、その中で自分はどういう役割を果たすだろう。等々にさまざまな仮定の問題について自分のとるべき、あるいはとらざるを得ない生き方を想定してみるのである。

学生たちは、そのほとんどが、将来自分のつくべき職業について シニカルであつた。どんな職業、いや職業というより会社、を選んだところで、そこで自分がやる仕事というものは決して大した意義のあるものではない。そこで自分はニヒルになり、あるいは立身出世主義の方向に居直るだろう、というた予想が ほとんどであり、中には、重役の娘と結婚することはかりに考える、といつたようなことを、シニシズムとも本気ともつかないような調子で言っている者もある。結局についても、学生たちはほとんど全部が悲観精神を当然のことのように予想し、しかもそれを社会的なヒロイックな行動から脱落して、ナバを抜かれて家庭という安全地帯へ逃避することでもあるかのような調子で予想している。

＜社会生活に就て＞

また、学生たちの文意に時徴的なことは、そのほとんどが、日本の将来に革命を予想していて(今ならちょっと違うかも知れないが)そのさい、自分は、いつたんは革命側の陣営に積極的に参加するだろうが、インテリの場合からあるいは革命勢力の理想と現実とのあいだの違いから脱落を主流を占めていることであつた。

若い労働者たちの文意はこれと全く対蹠的であつた。そこでは、立身出世主義は当然のこととされ、それについてのシニカルな態度と、実験問題として、今の日本の社会体制の中で、小商店主になろうとして小金を貯めるとか、夜学で何かの資格をとるとか、どれほど理想的なことを考えるか、という目標はそこにはない。

結局については、その前提としての恋愛について触れている文章は全くない。べつたん恋愛を問題という アセリに追い込まれている学生と労働者で、未来についてのイメージがこれだけ違うとは、いつたいどういわけだろうか。いま、日本の若い世代は未来への指標がなく、何をやつても無駄だ。自分はたぶんこういう結婚をするだろう。日本の社会にはどういう革命を想定しているかの問題、という ことであつた。

＜学生と労働者＞

なんという題の本だつたか、いま手もとにないので引用できないが、たしか教入の著者で、その中に社会学者の日高六郎さんが大変面白い研究を発表している本があつた。発行されたのは、たぶん四年か五年ぐらい前だろう、「日本人の思想と意識」というような題だつたと思う。

その日高さんの研究で面白かつたのはこういうところだ。まず、大学の学生二千名ぐらいと、ある大きな工場の同年輩の若い労働者を同じく二千名ぐらいを選んで、それに各自の未来の目標というのを書かせているのである。未来の自分とはまた傑作なアイデアだがずつと遠い将来の自分というものを仮りに想像してみて、その立場から、自分の生涯をふりかえつてみようという題問だ。

大学を出てから、たぶん、自分はこういう就職をするだろう。仕事に対しては自分はどの程度に有能であり、どの程度に熱意を示すだろう。それは社会からどういう評価を受けるだろうか。自分はたぶんこういう結婚をするだろう。日本の社会にはどういう変動が絡り、その中で自分はどういう役割を果たすだろう。等々にさまざまな仮定の問題について自分のとるべき、あるいはとらざるを得ない生き方を想定してみるのである。

学生たちは、そのほとんどが、将来自分のつくべき職業について シニカルであつた。どんな職業、いや職業というより会社、を選んだところで、そこで自分がやる仕事というものは決して大した意義のあるものではない。そこで自分はニヒルになり、あるいは立身出世主義の方向に居直るだろう、というた予想が ほとんどであり、中には、重役の娘と結婚することはかりに考える、といつたようなことを、シニシズムとも本気ともつかないような調子で言っている者もある。結局についても、学生たちはほとんど全部が悲観精神を当然のことのように予想し、しかもそれを社会的なヒロイックな行動から脱落して、ナバを抜かれて家庭という安全地帯へ逃避することでもあるかのような調子で予想している。

学生たちの文意に時徴的なことは、そのほとんどが、日本の将来に革命を予想していて(今ならちょっと違うかも知れないが)そのさい、自分は、いつたんは革命側の陣営に積極的に参加するだろうが、インテリの場合からあるいは革命勢力の理想と現実とのあいだの違いから脱落を主流を占めていることであつた。

若い労働者たちの文意はこれと全く対蹠的であつた。そこでは、立身出世主義は当然のこととされ、それについてのシニカルな態度と、実験問題として、今の日本の社会体制の中で、小商店主になろうとして小金を貯めるとか、夜学で何かの資格をとるとか、どれほど理想的なことを考えるか、という目標はそこにはない。

**結局については、その前提としての恋愛について触れている文章は全くない。べつたん恋愛を問題という アセリに追い込まれている学生と労働者で、未来についてのイメージがこれだけ違うとは、いつたいどういわけだろうか。いま、日本の若い世代は未来への指標がなく、何をやつても無駄だ